

令和元年度 博物館資料修理報告 — 組踊関係資料に関する修理報告 —

伊禮拓郎¹⁾ 當間 巧²⁾ 土井菜々子³⁾

Report of museum materials repaired in 2019

IREI Takurou¹⁾, TOMA Takumi²⁾, DOI Nanako³⁾

序

当館では、収蔵されている貴重な資料を後世に残すべく毎年修理事業を行っている。修理対象資料の選定基準は様々で、保存状態が悪く今後の保存管理に影響があり修理を急ぐ資料、企画展・特別展にて展示公開を急ぐ資料、学術的価値が高い資料、その他、特に館長が認めた資料などの基準を設けている。これらの基準に照らし合わせ、令和元年度は漆器資料1件2点、歴史史料1件、家譜史料3件、陶磁器資料1件の修理を行った。本稿では紙面の都合上、組踊に関係する資料の修理内容を報告するものである。

(伊禮)

1. 修理対象資料選定の理由

令和元年度は、組踊が初演されてから300周年の節目の年であり、県内各地で展示や催事が催された。当館においても「朝薫踊り、順則詩う — 琉球国時代の偉人 —」と題し、組踊を創始した玉城朝薫と、同時代を生きた文化人・程順則を中心とした人々の展示を行った。

本展では組踊に関連する資料を展示したが、「冠船之時御道具之図」(図1)と朱漆巴紋牡丹沈金天目台(図2)は資料の状態が悪かったため展示を行うことができなかった。

「冠船之時御道具之図」(以下、御道具之図)は、同治5年の冊封使を出迎える際に用いられた道具類

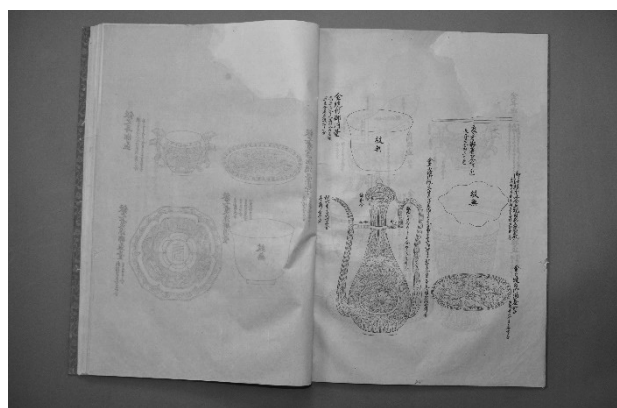


図1 修理前の状態。右上は過去の修理の後。冊子装の喉部分は、本紙の硬化のため大きなシワがよっている



図2 修理前の状態。酸漿や高台が欠損し、自立できない状態にある。

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

²⁾ 石川堂代表、文化財修復・表具師

³⁾ 琉球漆工藝舎代表、漆芸文化財修復師

を書き写した史料である。虫損のためか、過去に修理され簡単な繕いがなされる。また、本紙と表紙をホチキスで留め、表紙は裂を用いて装丁している。過去に修理されているため一見きれいな状態に見えたが、本紙が固く、頁を開いて展示することが難しくなっていた。他にもホチキスの錆びが広がり、留めている部分から穴が広がっていることも確認された。本資料は冊封使を迎えた際にどのような道具を用いていたか知ることができる貴重な資料であり、画像利用等での活用が多い史料でもある。学術的価値も高く、修理後の展示利用も多くなると判断されたことから修理対象とした。

沈金茶托（以下、天目台①・②）は、琉球王国時代（推定年代：琉球18～19世紀）に製作された漆器である。琉球王家を象徴する左巴紋に牡丹唐草文を取り合わせるのは、琉球の祭祀道具などによく見られる文様構成である。本資料は「冠船之時御道具之図」に描かれているタイプの漆器で、冊封使歓待の際に使われた道具をうかがい知ることができる良い作例である。しかし、高台が欠け自立することが困難であったため展示することを見送った経緯がある。御道具之図と合わせて、資料の重要性や展示効果が高いことを鑑み、修理対象として選定した。

（伊禮）

2. 御道具之図の修理報告

冠船之時御道具之図は、紙本墨書の冊子装である。修復前の法量は丈55.0cm、巾40.0cm、修復後の法量は丈55.3cm、巾39.6cmである。

修復前に行った損傷状況の確認から、本紙の時代的な汚れ、本紙の虫害欠損、③冊子を綴じるホッチキスが錆びて本紙に茶色の色が付着し変色していることを確認した。

これを受け、沖縄県立博物館担当者と次のような修理方針を確認した。

- ①冊子装を解体しホッチキスを除去する。
- ②本紙の虫害欠損箇所に補修（繕い）を施す。
- ③修復後は展示と保存を考慮し冊子装の装丁ではなく、収納保存にあたっては四方帙を新調する。

修理は、博物館担当者と相談した修理方針に則りながら行い、必要に応じて適宜修理仕様の相談を

行った。以下は、修理の手順である。

- (1) 事前調査を行ったあと、冊子装を解体し本紙からホッチキスを除去（図3）。

なお、表紙には作品名の書かれた題箋があるため、解体後の表紙・裏表紙はそのまま博物館に返却した。

- (2) 汚れの除去作業。作業は本紙を傷めない範囲にとどめた。本紙を養生紙で表打ちし仮張りを施した（図4）。



図3 ホッチキスを除去する様子跡の位置



図4 本紙の仮張りの様子

- (3) 小麦粉澱粉糊【新糊】を用い本紙の綴じ穴部分、虫害欠損箇所に繕いを施した（図5・6）。補修紙は楮紙を選定した、使用に当たっては天然染料矢車で染色、水酸化カルシウム溶液で媒染後用いた。
- (4) 収納保存にあたっては弱アルカリの板紙（AFハードボード）で四方帙を新調し冊子を包み、弱アルカリ性のキットボックス箱に保存した（図7）。

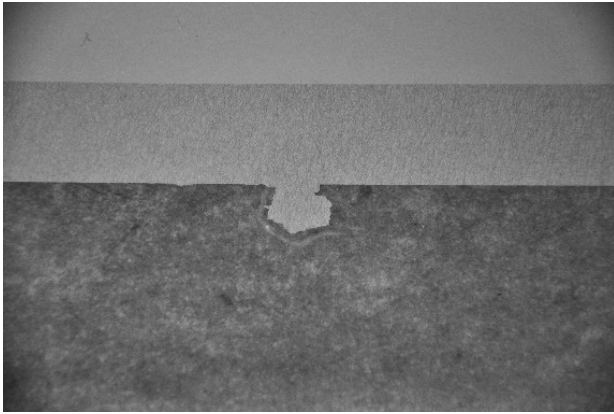


図5 虫害欠損箇所

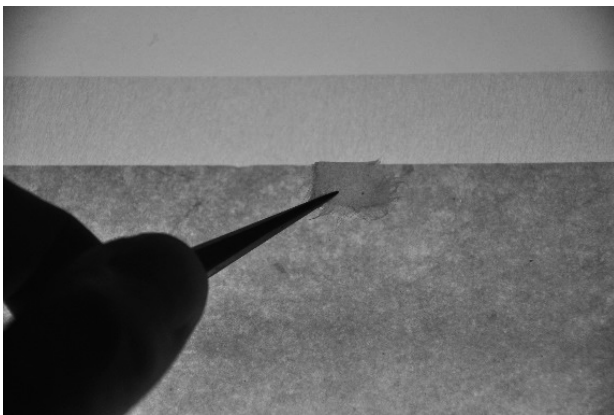


図6 繕い作業の様子

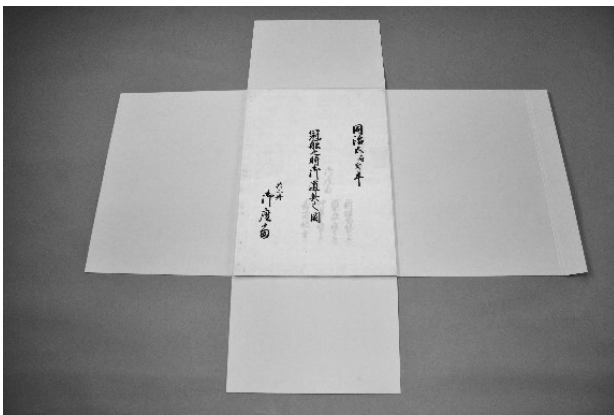


図7 新調した四方帙

なお、修復資材として、使用した新糊と染料は下記のとおりである。

- ・小麦粉澱粉糊 新糊（中村糊店・京都市）

原材料は小麦粉澱粉。水によく沈殿させ煮出した後、糊化したものを使用した。新糊は伝統的に接着剤として使用されており、比較的に変退色が少なく、乾燥後の変色も極めて少なく十分な接着力

が有ることから使用した。

使用に当たっては水で希釈した。希釈率は濃すぎると裏打ち後料紙が硬化する為、最低限接着に必要な濃度で使用するのが望ましい。ただ、希釈率は料紙・裏打ち紙の厚さ、大きさ、気温、湿度、作業条件等によって一定では無く、これらの条件を考慮し決定する。補修紙の接着に使用した。

- ・天然染料 矢車（中村長商店・京都府京都市中京区）

原材料はカバノキ科ハンノ木属夜叉五倍子の果実。果実を水で煮出した後の染料溶液を使用する。補修紙の染色に使用。

（石川堂 當間）

3. 沈金茶托の修理報告

沈金茶托は、木製総体朱漆塗の天目台で、三巴紋と牡丹唐草文を沈金であらわす。資料番号355番の資料であるが、地文がない天目台①と七宝繫地文の天目台②からなる。なお、天目台①・②は文様配置・表現が異なるため、製作時からセットで使用されたものではないと思われる。修復前に行った事前調査から、下記のことが分かった。

天目台①（図8・9）

直径約15.2cm、高さ6.8cm。全面にホコリが被り、白濁している。漆塗膜は経年劣化が進んでおり、艶を失っている。高台は大きな木地欠損がある。また、強く打ち付けたと思われる歪みが見られる。乾燥による木地の収縮で塗膜が浮き、木地との間に隙間ができています。羽の一部に強く擦ったと思われる傷が見られる。羽の縁には、固く茶色い汚れが強く付着している。酸漿の縁は、小さな欠けが複数見られる。



図8 天目台①全景

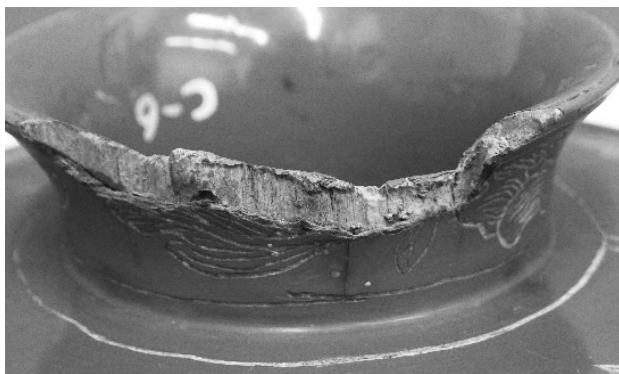


図9 天目台①の高台欠損部



図12 天目台②の酸漿欠損部

天目台②（図10・11）

直径約15.3cm、高さ6.6cm。全面にホコリが被り、白濁している。酸漿と羽との接合部、その周辺には、灰色の汚れが付着している。漆塗膜は経年劣化が進んでおり、艶を失っている。高台は広範囲にわたり木地が欠損しており、自立出来ず不安定な状態である。また、欠損部周辺の塗膜は特に剥落も多い。酸漿の上縁には、大きな木地欠損が見られる。さらに、内側に一か所、乾燥による木地の収縮で塗膜が浮き、亀裂が入っている。高台内側の木地露出部分に白カ



図10 天目台②の全景



図11 天目台②の高台欠損部

ビが生える。羽の裏側には、放射状に何本もの塗膜亀裂が見られる。また、一部に擦ったと思われる傷が見られる。高台や羽の縁に過去に行われた修理があり、その部分が再度破損している。

これを受け、沖縄県立博物館担当者と次のような修理方針を確認した。

- ①修理は、現在我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修理に従い、現状保存修理を原則として行う事とする。
- ②修理に際しては、十分に事前調査を行い、傷みなどの現状を確認した上で修理工程を決定する。また、写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理ごと比較できるようにし、修理終了後報告書を作成する。
- ③高台および酸漿の木地欠損部分は、大変大きく不安定なため、展示に耐えられるよう形状復元を行うこととする

修理は、博物館担当者と相談した修理方針に則りながら行い、必要に応じて適宜修理仕様の相談を行った。以下は、修理の手順である。

- (1)修理前の調査・撮影終了後、塗膜の汚れを取り除くためのクリーニングを行う。基本的に水を含ませた柔らかな木綿布で拭き上げるが、カビや油分を含んだ汚れなどはアルコールを用いて除去した。塊となって付着する汚れは細心の注意を払い、刃物を用いて削り取った。そこ裏に白色塗料で記された番号は、担当学芸員の了解を得て除去することとした。

(2)クリーニング後、木地および下地が露出した部分に生漆を含ませて補強した（図13）。



図13 木地に生漆を含ませる様子

(3)塗膜押さえをするため、各修理部分の湾曲に合わせて彫刻した木型に、アクリルやビニールをあてた治具を作成した。塗膜押え作業は、接着用に調合した麦漆を溶剤で希釈し、塗膜剥離部分に含浸させ、溶剤を揮発させた後、クランプや心張り法を用いて安定、接着を行った（図14）。

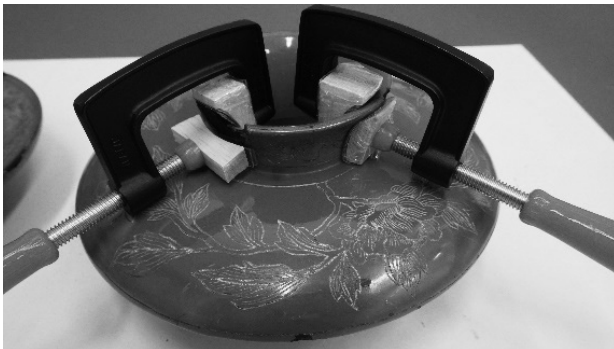


図14 クランプ圧着による塗膜押え

(4)高台の木地欠損部には、乾漆技法を用いて形状復元を行った（図15）。刻苧は粒子の異なるものを数回に分けて付けた。刻苧が十分に乾燥した後、刻苧および亀裂箇所の下地付けを行い、表面を整えた。下地表面の仕上げは、生漆で調合する通常のサビ下地を使用した。漆の特性上、作業後しばらくは、黒色に見えるが、年月が経てば茶色く変色するため、あえて着色は行わなかった。

(5)今後起きるであろう塗膜と下地の段差部分の損傷を防止するため、接着した塗膜の際には、わずかに錆下地を施した（図16）。

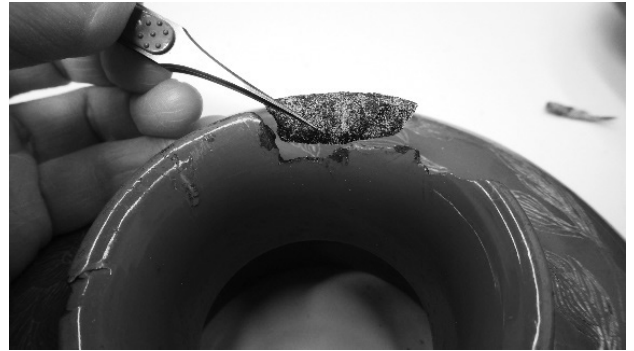


図15 乾漆で形状復元した欠損部



図16 際錆の様子

(6)塗膜安定後、劣化した塗膜の弾力と艶を取り戻すための漆固めを行った。作業は、溶剤で希釈した漆を塗膜面に塗布し、表面に漆が残らないよう拭き取った。その際、沈金の溝に漆が入らないよう、細心の注意を払った（図17）。



図17 漆固めの様子

(7)これまで桐箱がなかったため、1件2点の天目台を入れるための桐箱を新調し、修理完了とした。

（琉球漆工藝舎 土井）

4. 修理完了に対する所見と今後の活用

各修理工場の修理により、「冠船之時御道具之図」と沈金茶托が展示できるようになった。

「冠船之時御道具之図」は、冊子装を解体したことにより、複数の頁を同時に展示できるようになった。冊子装で展示していた時は、冊子ののど部分に大きな負担を強いていたが、今後はその心配がないため、資料に与える負担が軽減されたといえるだろう。また、複数の頁を同時に展示することにより、来館者へのさらなる理解促進を行えるという点で展示効果が上がったと考えている（図18）。

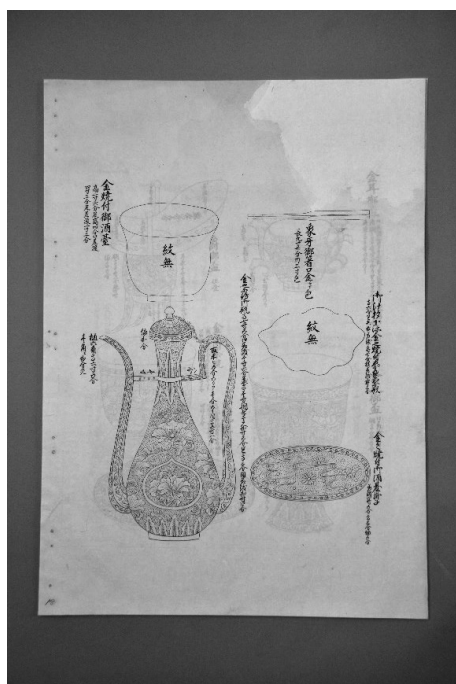


図18 修理完了後（御道具之図）

沈金茶托は、高台の部分復元を行ったことにより、自立できるようになった。茶托は収蔵以来、薄葉紙や綿布団に包まれるだけの梱包であったため、資料が傾き、収蔵庫内にあっても破損が広がる恐れがあった。しかし、今回部分復元を行ったこと、桐箱を新調したことにより保存・管理環境が改善された（図19）。

両資料の修理・修復処置は、資料の展示効果を考えるだけのことなく、今後の資料保存・保管のためにも重要な処置であったと認識している。両修復工房には、適切な処置を行っていただいたことに感謝申し上げたい。なお、修理が完了した両資料は、



図19 修理完了後（沈金茶托）

令和2年5月19日～6月19日にかけて開催された博物館企画展「新収蔵品展—令和元年度収蔵資料—」において修理完了報告を兼ねて展示公開した（図20・21・22）。

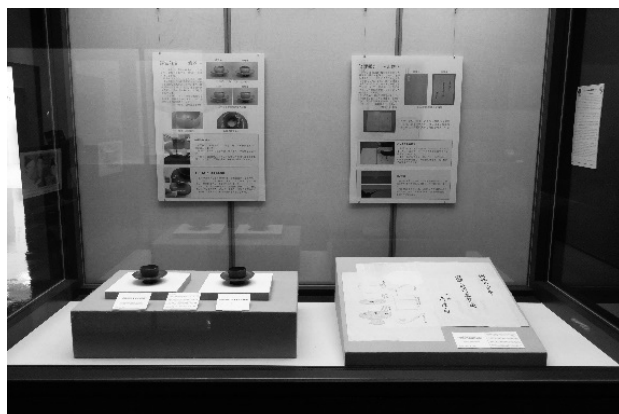


図20 新収蔵品展での展示公開

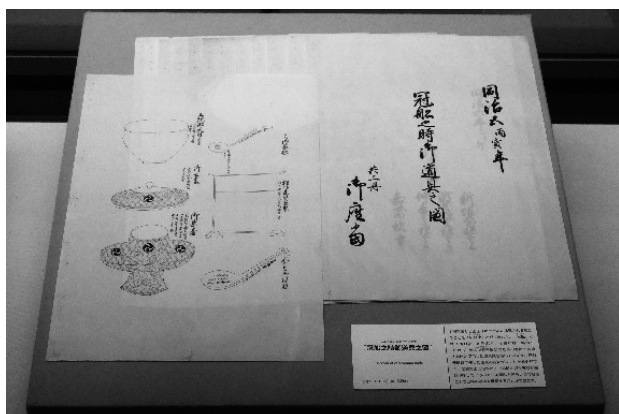


図21 展示の様子（御道具之図）



図22 展示の様子（沈金茶托）

今後は、両資料とも定期的に展示を行っていく予定である。特に「冠船之時御道具之図」は、冊封使歓待の儀礼で用いられていた道具を知ることができるだけでなく、琉球で作られていた工芸品を理解する上でも重要な資料である。他機関から画像利用申請の多い資料であるため、今後は展示公開だけではなく、画像利用なども含め、多くの県民・沖縄を愛する人々のために寄与できればと思う。

沈金茶托は、「冠船之時御道具之図」とともに展示すれば、来館者への理解促進に繋がる資料である。御道具之図に描かれている他の資料とともに展示することで、王国時代の儀式をより立体的に伝えることができると思う。また、類例が複数あるため、今後の研究次第では琉球の沈金技法や喫茶文化を知る手がかりになると考えられる。本資料は首里王府で漆器製作を所管していた貝摺奉行所製の漆器である可能性も想定されるので、琉球漆工史を紐解く上でも貴重な資料になってくるだろう。（伊禮）

跋

当博物館には、約10万件の資料が収蔵されており、その中から毎年資料を選定、修理を行っている。しかしながら、限られた予算の中から修理事業を行っているため、すべての資料の修理を行えていないのが現状である。基本的には資料の展示公開の頻度や展示効果の高さを考慮して優先順位をつけているが、優先度が高くても予算を超過するため、修理を行えていない資料もある。

今後は、修理修復の助成金の利用も視野に入れ、沖縄県民の貴重な財産を後世に伝えていけるよう模索してく所存である。（伊禮）